《エッセイ》

甲斐利恵子国語教室に学びて

2016.10.06-2016.12.15

達富　悠介

1. はじめに

「持っている力で勝負しない」

これは甲斐利恵子のことばであり、大村はまのことばである。新しい単元を始めるとき、生徒がその日の学びをひらくとき、甲斐は折にふれて、このことばを生徒へ告げる。生徒が「持っている」以上の力で学習する。甲斐利恵子国語教室はそんな教室だ。

私は昨年の 10 月から 12 月にかけての 17 日間、甲斐利恵子国語教室に通った。豊かな学びとはなにか。その答えを探るために甲斐の実践を追った。

2. 甲斐利恵子との出会い

私が甲斐利恵子を初めて訪ねたのは 2016 年 10 月 6 日のことだ。ビルが建ち並ぶ東京、赤坂。建設中の高層マンションの麓に港区立赤坂中学校はある。陽が傾いた放課後の静かな廊下を国語科室へと向かった。

国語科室には甲斐とふたりの生徒がいた。私は教室には入らず耳を澄ました。「ここまでこんなに頑張って書いてきたのに、最後の段落でなんで手を抜くかな」と甲斐。生徒は苦い顔をして「はい」とだけ口にした。

甲斐は「少年の主張」を添削していた。その生徒は数日後に控えた発表会の学年代表だった。整った字で書かれたその主張は、とてもよく書けていた。しかし、甲斐は、最後の段落にある「奥深い」ということばを許さなかった。「持っている力で勝負しない」。簡単なことばで済まそうとする生徒には厳しい。

3. 国語科室の実際

甲斐の授業はいつも国語科室で行われた。授業 5 分前になると、ぞろぞろと生徒が入ってくる。そんな国語科室には「甲斐実践らしさ」が詰まっている。

廊下側の本棚には、40 冊ほどの国語辞典が用意されている。三省堂の新明解や大修館書店の明鏡、学研やベネッセなど複数の種類の国語辞典がずらっと並んでいる。生徒は授業前に 1 冊持って席に着く。新しいことばとの出会いを大切する、そんな工夫だ。

その横の本棚には、古典に関する本が人数分並んでいる。竹取や平家、徒然草などはビギナーズクラシック。論語は斎藤孝『声に出して読みたい論語』。教科書で見られる古典が一通り揃っている。国語科室の古典に関する本は甲斐個人の蔵書のため、生徒は自由に書き込むことができる。

そして、国語科室の後ろには、これまでの生徒が作成した学習記録が所せましと積まれている。生徒は半年に一度、自身の学びを学習記録として綴じる。その学習記録が数年分、数十冊。これまでの甲斐実践と生徒の学びを辿ることができる。

これが甲斐利恵子国語教室の日常の風景である。甲斐実践はかけがえのないことばに囲まれた教室で行われる。

4. 甲斐実践の実際

私は 3 ヶ月間の授業参観で、魅力的な単元にいくつも出会った。それは提案性の高い単元であり、生徒の生きた学びをみることができる単元であった。

ここでは、卒業論文で詳しく検討した単元「作品の特徴をとらえる」を紹介する。私に「甲斐実践とは」を語ることはできないが、その魅力のひとつを示すことはきっとできると考えている。

中学 2 年生の単元「作品の特徴をとらえる」は、物語文「盆土産」(光村図書「国語 2」)を中心教材とした単元である。この単元の学習活動は、ふたつの学習過程に分けられる。ひとつめの学習過程では「盆土産」を「この温かさはどこからくるのだろう」という問いによって分析する。そこで学習者は、作品の特徴を分析し表現する力をつける。ふたつめの学習過程では、先の学習過程でつけた

力を活用して、学習者それぞれが選んだ作品の特徴を分析する。この際、分析する問いとなる「この〇〇はどこからくるのだろう」の〇〇の部分は学習者自らが立てる。「作品の特徴をとらえる」という学習課題は単元を通して変わらないが、対象とする作品はふたつの学習過程で異なっている。

この単元の大きな魅力は、生徒自らが学びを創造していた点にある。「盆土産」での問いは、「この温かさはどこからくるのだろう」である。それを分析する学習過程で、ある生徒は登場人物の会話(台詞)に注目し、ある生徒は情景描写に注目した。登場人物の人間関係に注目した生徒もいる。どの観点で分析するかについて、それぞれの生徒が自由に選択し、判断できる。

次の学習過程で、どの作品を選ぶのかも生徒が自由に決める。小学校の国語科教科書から「ごんぎつね」や「大造じいさんとガン」などを選んだ生徒もいれば、幼い頃に読んだ「100 万回生きたねこ」や「星の王子様」を選んだ生徒もいる。作品の特徴を分析する問いも「温かさ」の他に「愉快さ」や「楽しさ」、「切なさ」など、自身の疑問を解決するための適切な問いを立てることができる。

生徒は学習の過程で、自身の関心や疑問によって学習材や問いを自由に選択し、判断していた。「選ぶことは主体的な活動のはじめの一歩」。甲斐の信念はそのまま単元の魅力となっている。

5. 「てびき」すること

黙々と学びに向きあう生徒。国語科室は静寂に包まれる。鉛筆を走らせる音や辞書をめくる音が聞こえる。なかには、手が止まっている生徒や困った顔をしている生徒もいる。そんな「てびき」を必要としている生徒のもとへ、甲斐は寄り添う。

甲斐はよく、生徒の原稿用紙やワークシートにことばを書き込む。書き出しを書いてあげることもある。先の丸まった鉛筆で「こういうことばを使ったらいいんじゃない？」とことばを授ける。

「本当は生徒が自分で完成したわけじゃないんだけど。そう勘違いさせてあげることも大事だと思うんです」と甲斐は言う。うまくことばにできずにいる生徒や 1 行目がわからない生徒に手を差し伸べる。小さく背中を押された生徒は「ああ！」と明るい顔になり、また手を動かしはじめる。甲斐の「てびき」は、生徒をひとりでは到達できなかったところまで連れていく。

6. 「学ぶ」こと

甲斐利恵子国語教室で生徒は「身を乗り出し」て学んでいる。今これがしたいという生徒の熱い思いが学びの原動力となる。

ひとつの単元は「単元びらき」から始まる。「国語教室通信」や何気ない会話に込められた「種まき」が実を結び、新しい単元が始まる。甲斐はこの「単元びらき」をとても大切にしている。

ある単元の「単元びらき」で、甲斐は数冊の絵本を用意した。多くの生徒が一度は目にしたことのある絵本だ。甲斐が黒板の前で 1 冊ずつページをめくると、生徒は「これ知ってる！読んだことある！」と机から「身を乗り出し」ながら口にした。「はやくこれしたい！」という声から学びが生まれる。

7. 「教えられる」こと――「おわりに」に代えて

その日の授業が終わると、机を合わせて甲斐と話した。授業での配布物や生徒との談話の意図、単元学習のこと、大村のこと。尋ねたいことはたくさんあった。

一度だけ国語科室でコーヒーを飲みながら甲斐と話したことがある。甲斐利恵子国語教室のこれまでの歩みを辿った。「知恵が生まれる場は気持ちがひらいてなくてはいけないんです。だから優劣を越える教室をつくりたい」と甲斐。大村に学び、大村国語教室に「教えられた」甲斐だからこそ、「優劣のかなた」は国語教室の信念になっている。

私は教壇に立つ甲斐の姿を追った。みごとな「勘違い」かもしれないが甲斐利恵子国語教室の入り口に立てた気がする。真似をしたい、教えられたいと思える師に出会うことができた。「教えられる」ことは、本当に尊いことだ。甲斐が大村に教えられてきたように、私もきっと甲斐に教えられている。

（横浜国立大学 教育人間科学部）